

TAEKOのきまぐれ日記

2011.5.09.

危と機

危機は二様に作用する。危険な状況を強られること、もう一つは、その危険に反射されて浮かび上がった命の価値を、その光の中で再点検することだ。

3月11日の災害の中、福島から200キロの遠隔の地で、人の生死をみながら、みずからの人生にその意味を取り込んでいく人もいる。

2万人以上の人の命を奪った災害は、東京で生きる私のまわりの人たちにも影響を与えている。生まれてこのかた、前髪を短くした事などなかったという26歳の生徒さんが、前髪を短く切ってあらわれた。一度、前髪を切ってみたいと長い間思っていたが、ついぞその勇気がなかったものを、「今回の津波が私の背中を押してくれた。」という。

「今という瞬間にやりたいことをやらなければ、いつ命がなくなってしまうのかはわからない。」思いに押されて、前髪を切った彼女の顔を、今までとは全く違ったオーラが覆っていた。

ニュージーランドで大学生活を含む5年間を過ごし、永住の場をニュージーランドと決めていたKさん。両親の反対にあい、将来のヴィジョンを描ききれないまま悶々と過ごす難しい時期を過ごしていた。ところが、今回の災害で両親の考えが変わったという。

「今という瞬間にやりたいことをやらなければ、いつ命が亡くなってしまうのかわからない。」だから、「生きているいま、ニュージーランドで人生を築きなさい。」

私自身も、反射の光を予期しない形でうけとった。しばらく連絡が途絶えていたニューヨークに住む友達とも、震災を機に交流が復活した。

死という非日常生が、日常性のなかに埋もれていた「なにかとても大切なもの」を探知機のように探し出してくれる。

人の死は、偉大な導き手、として私たちに与えられている贈り物だと思う。